

Title	雑誌『学校の庭』(一八七〇～一八七七)から見た近代エジプトにおける教育と学知
Sub Title	Education and knowledge in modern Egypt through the analysis of the magazine Rawḍat al-madāris (1870-1877)
Author	藪内, 彩季(Yabuuchi, Saki)
Publisher	三田史学会
Publication year	2025
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.94, No.1/2 (2025. 1) ,p.31 (31)- 54 (54)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20250100-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

雑誌『学校の庭』(一八七〇～一八七七)から見た 近代エジプトにおける教育と学知

藪内 彩季

はじめに

雑誌『学校の庭』*Ranqat al-Madāris*は、一九世紀末エジプトの教育雑誌である。アラブ地域初の教育雑誌と言われ、一八七〇年四月に学校局(Divān al-Madāris)が創刊し、一八七七年九月に予算削減の煽りを受けて廃刊になるまで、七年半にわたり隔週で発行された[Livingston 2018: 63, 114]。当時のエジプト副王イスマーイール Ismā'īl (在位一八六三～一八七九)は、近代化事業の一環として教育改革に注力した[Hunter 1986: 186; Rafti 1948: 210]。一八六八年にイスマーイールにより学校局の長に任命されたアリー・ムバーラク 'Alī Mubārak (一八二四～一八九三)¹⁾は、伝統的な初等学

校クッターブ⁽²⁾を近代学校に再編することを試みたほか、アズハル学院⁽³⁾の学生を近代学校の教員に育成するため、一八七二年にダール・アル＝ウルーム(Dār al-ʿUlūm)を設立した[Heyworth-Dunne 1939: 347-348, 361, 377]。彼は、フランス留学を経験したアズハル学院出身のウラマー、リファア・アフターウィー Rifā'a Rafī' al-Tahāwī (一八〇一～一八七三)⁽⁴⁾を『学校の庭』の責任者として任命した。このような背景で刊行された『学校の庭』は、同時期に行われた数々の教育事業の一環に位置付けることができる。

先行研究によれば、『学校の庭』は宗教的な知と西洋近代的な知の融合を目的のひとつに掲げていたとされる[Kenny 1967: 47; Livingston 2018: 55]。その理由を

Yousef [2008: 112, 113, 124-125] は、『学校の庭』の編集者と執筆者が、知識 (ilm) を近代的か伝統的か、ヨーロッパかエジプトか、世俗的か宗教的か分類することなく、必要なあらゆる知識を活用することが社会の改善に重要と考えていたためと指摘する。実際に同誌創刊号の巻頭言では、「現代の教養人 (fudalā' asrīyūn) と過去のウラマー (ulamā' naḍīn) 双方の論考を掲載すること」「多くのウラマーと聡明な教養人 (fudalā' jāhābitha)」が様々な記事を書くことが約束されている [Rauḍa 1870: no. 1: 4-6]。

『学校の庭』に関する代表的な先行研究として、『Hasan and Dusūqī 1975』と『Yousef 2008』が挙げられる。前者は、同誌がさまざまな分野の学知を融合し、学術・文学の新しい流れを形成した点、二〇世紀初頭出版された数多くのアラビア語定期刊物と近代アラブ地域における思想復興 (ナフダ raḥḍa) に多大な影響を与えた点を評価している [Hasan and Dusūqī 1975: 419, 421-422]。一方、後者は『学校の庭』によってエジプトの新旧の制度の融和の可能性を示した点、教育を議論する場を提供した点、従来は宗教的な知識を意味したイルム概念にその他の知識を包含する新たな定義を付与した

点を評価している [Yousef 2008: 124-125]。

以上のように、『学校の庭』には様々な価値が認められているが、雑誌そのものに関する分析は十分とは言えない。Hasan and Dusūqī [1975] は、編集部の構成や掲載記事の種類など同誌の基本的な情報を示したほか、代表的な執筆者三四人の出自と誌面への貢献を紹介した。他方、雑誌全体で多くの頁数を占めている記事の単なる引用に留まっており、主題ごとに掲載記事を分類する作業は行われていないため、数量的把握ができず、刊行期間を通じた誌面の全体像の把握を困難なものにしている。一方、Yousef [2008] は『学校の庭』に掲載された記事の主題とその執筆者の属性をそれぞれ図表化することにより可視化した。しかし、彼女の分析もまた同誌の全体像を十全に示すには至っていない。なぜなら、彼女は同誌全体の半分に満たない三年半分の記事のみを分析し、それ以外の記事を対象から外しているほか、図表化するにあたり各記事の分量の差異を考慮に入らず、記事の点数にのみ注目している。その結果、一部の号に顕著な宗教関連記事の多さを同誌の特徴のひとつと誤認しているほか、記事の数こそ多いものの、分量は少ない数学や工学に対する高い関心が存在したかのような印象を与えて

いる [Yousef 2008: 114]。

以上のような先行研究の現状をふまえ、本稿は雑誌『学校の庭』のより詳細な全体像の提示を主な目的とする。まず、誌面の構成や部数、価格など同誌に関する基本的な情報を示した後、誌面の編集や記事の寄稿を通じて同誌に関わった人々の経歴を概観する。最後に掲載記事を主題別に分類し、同誌がとくに重視した主題を示すと共に、当該主題が重視された背景を当時の社会状況と関連付けることにより明らかにしたい。

一 『学校の庭』の特徴

(一) 誌面の構成と分量

『学校の庭』の構成は、刊行時期を通じて、以下の通りである。表紙と目次の後に、まず告知欄があり、続いて単発記事が掲載された後、末尾に連載記事 (Kıtab) が掲載される。告知欄には、主に学校局や『学校の庭』編集部からの告知が掲載されている。

『学校の庭』の分量は、最長五六頁、最短七頁と号により大きく異なるが、平均は約三五頁となる。当初、分量は年を経るごとに次第に増加し、一八七三年には平均四〇頁弱の長さになったものの、その後減少に転じ、一

八七六年の後半から本格的に分量が減少した。一方、記事数は創刊年と次年次 (一八七〇年と一八七一年) に最多を記録し、平均九点弱の記事が掲載されていたが、記事数は年次を下るごとに次第に減少し、最後の二年間は平均五点前後と半減した。また、記事数の減少が始まった三年次 (一八七二年) 以降、それを補うかのように掲載記事の長文化が始まり、特に四年次 (一八七三年) 以降は連載記事が増加した。加えて、三年次以降、『学校の庭』編集主幹タフターウィーが編集を担当した官報『埃及諸事』 *al-Maḡā' i al-Misriya* (一八二八年創刊) や後述する常連投稿者の一人アブドゥッラー・アブー・スウード 'Abdullah Abū al-Su'ūd (一八二〇〜一八七八) がカイロで発行した新聞『ワデー・ニール (ナイル河谷)』 *Wādī al-Nīl* (一八六七〜一八七二) などの定期刊行物からの転載が目立つようになる。転載された記事は世界情勢に関する報道記事が多いが、女子学校に関する報告記事や [Rauḍa 1874: no. 16: 3-5, 1874: no. 17: 4-7, 1875: no. 13: 4-5]、児童の健康に関する記事 [Rauḍa 1876: no. 14: 8-11] などの教育や子育てに関する記事も転載されている。

表1 『学校の庭』 各号の頁数と掲載記事数の平均

年 次	1870 年	1871 年	1872 年	1873 年	1874 年	1875 年	1876 年	1877 年
頁 数	30.8	31.25	39.16	39.66	38.65	37.33	33.62	26.87
記事数	8.6	8.92	7.45	6.56	6.64	6.49	5.12	4.55

出典：筆者作成。

(一) 出版部数と読者層

『学校の庭』の出版部数は、創刊当初は三五〇部だったが、後に教師や学生、政府職員などに購入させるようになったことに伴い、七〇〇部に増刷された [Livingston 2018: 64, 115; Reid 2002: 112]。『学校の庭』の表紙によると、同誌は年間定期購読の形式を取っており、購読料は地域により異なった。カイロ市内の場合七七クルシユ、カイロ市外は八二クルシユ、国外は九〇クルシユ、フラン建てで購読する場合は二三・五フランとなっていた。ただし、予科学校の学生には無償提供されていたこと⁽⁷⁾、一部の高等教育施設には、図書館が併設されていたこと [Green 1988: 462-463]、授業以外の時間 (休憩時間や放課後) に雑誌を閲覧するように学校局が通達を出したこと [Hasan and Dusūqi 1975: 89] など

から、同誌は教員や学生の間に一定数の読者を獲得していたと考えられる。

(二) 編集者

既に述べたように、『学校の庭』はムバーラクとタフターウィーの主導により創刊されたが、実際の編集作業を担ったのは、多彩な分野から選ばれた編集者から成る編集部であった。編集部は、編集主幹 (nazir) と編集長 (mubāshir taḥrīr) に加え、各分野の担当編集者七名からなる。編集主幹はタフターウィーが務めたが、編集長にはタフターウィーの息子アリー・ファフミー・Al-Fahmi b. Riḥā (一九〇三没) が就いた⁽⁹⁾。一八七三年にタフターウィーが死去すると、同年第二二号以降、アリー・ファフミーが編集主幹に就任したが、編集長の後任は置かれなかった [Rauḍa 1873: no. 22]。彼らは編集を担うだけでなく、自ら記事を寄稿することもあった [Brugman 1984: 79; Reid 2002: 112; Stolz 2018: 108]。ムバーラクとタフターウィー親子以外の編集者とその担当分野は、表2の通りである。ドイツ出身のハインリヒ・ブルークシユ Hinri Brücksh / Heinrich Brugsch (一八二七〜一八九四) を除き⁽¹⁰⁾、彼らは全員エジプト出

表2 『学校の庭』 編集者とその担当分野

氏 名	担当分野
アブドゥッラー・フィクリー	アラビア語（文学、文法）
ハインリヒ・ブルークシュ	社会（歴史）
イスマール・ムスタファー・ファラキー	自然科学（天文学）
ムハンマド・カドリー	社会（地理）、アラビア語（道徳）、宗教
ムハンマド・バドル	医学
アフマド・ナダー	自然科学（植物学）
ウスマーン・マドゥーフ	アラビア語（謎々）

出典：[Rawḍa 1870: no. 1: 6-7; Hasan and Dusūqī 1975: 324-365] より筆者作成。

身者である。また、イスマール・ムスタファー・ファラキー Ismā'īl Muṣṭafā al-Falākī（一八二五～一九〇一）など半数がタフターウィーと同様、留学を経験しているほか、大半が近代教育を受けていることから、彼らはいわゆる伝統的知識人層とは一線を画す人々といえる。他方、アブドゥッラー・フィクリー 'Abdullāh Fikrī（一八三四～一八八九）のように、タフターウィーが学んだアズハル学院で研鑽を積んだ人々も参加するなど、編集部の構成員にも伝

統を西洋近代と融合あるいは調和させようとする意向が反映されていた。さらに、編集長となったアリー・ファフミーは勿論のこと、ムハンマド・カドリー Muḥammad Qadrī（一八二一～一八八八）のようにタフターウィーの影響を受けた人々が含まれている点からは、人選にタフターウィーの意向が反映された可能性が強く示唆される。ブルークシュとファラキーに加え、ムハンマド・バドル Muḥammad Badr（一九〇二没）やアフマド・ナダー Aḥmad Nadā（生没年不詳）、ウスマーン・マドゥーフ 'Uthmān Madūh（生没年不詳）など、教育経験のある人物が数多く編集部にいたことは、同誌の教育雑誌としての性格の反映と考えることができる。また、一八七一年にムバラクがダルブ・ジャマーミーズ Darb al-Jamā'iz を会場に開催し、ダール・アル＝ウルーム設立の契機となった連続講義に登壇したブルークシュ、ファラキー、ナダーが編集に参加したことは [Kalmbach 2020: 89]、『学校の庭』と同校の関係を考えるに非常に示唆的である。

（四）執筆者

『学校の庭』に掲載された記事の多くは記名記事であ

表3 各年次の執筆者数

年 次	1870 年	1871 年	1872 年	1873 年	1874 年	1875 年	1876 年	1877 年
執筆者数	63	83	41	40	35	37	33	17

出典：筆者作成。

り、多くの場合筆者名に加え、その所属・職位が明記された。七年半に及ぶ刊行期間を通じて計一九八名が同誌に記事を寄稿しているが、表3に示したように、年毎の延べ人数を見ると、執筆者の数には変化が見られる。初年次（一八七〇年）と二年次（一八七一年）には比較的多数の執筆者が寄稿したものの、三年次（一八七二年）に執筆者数が半減した後、最終年次（一八七七年）に再度半減するまで年毎の執筆者数はほぼ横ばいで推移した。このような執筆者数の減少が、いかなる要因によるものかは明らかでない。ただし、同誌の記述からは寄せられる原稿数の減少と編集部による掲載可否の判断の双方が影響したことがうかがえる。刊行開始からわずかに半年余りの一八七〇年十一月には、原稿の「供給の減少」(qill'imdad)に伴う刊行の遅延が生じているとの告知が出されたほか

[*Ra'uda* 1870: no. 18: 2]、一八七四年九月には審査の嚴格さこそ定かではないものの、記事が「審査者 (mutali'in) により綿密に審査される (yanzuru bi-diqa'in)」旨の記載がある [*Ra'uda* 1874: no. 14: 4]。また、執筆者数が減少した後、編集者自身が執筆した記事が増えることから、とりわけ外部の執筆者の慢性的な不足が起きていたと思われる。⁽¹⁷⁾

『学校の庭』に寄稿したのはどのような人びとだったのだろうか。彼らの属性には編集者のそれと同様の特徴が見られる一方、異なる特徴も見出される。表4に示したように、編集者と同様に、官僚や教師、医師など近代的専門職に従事した人々が執筆者の大半を占め、少数ながらウラマーが含まれた。⁽¹⁹⁾ また、同誌に五点以上の記事を寄せ四〇頁以上の頁数を占めている「常連執筆者」に限定すると、全員が教師経験のある学校関係者となる。⁽²⁰⁾

さらに、彼らの中にミーハイイル・アブドゥッサイイド Mikhā'il 'Abd al-Sayyid (一八六〇―一九一四)⁽²¹⁾ やアブ・スウード⁽²²⁾、サリフ・マジュディー Salih Majdi (一八二七―一八八一) などタフターウィー「門下」の知識人が多く含まれている点 [Yusef 2008: 121]⁽²³⁾、マンスール・アフメド Mansūr Ahmad (生没年不詳) のよ

表4 執筆者の属性ごとの人数と執筆記事数

属 性	官 僚	学 生	教 師	医 者	ウラマー	その他	不 明
人 数	55	53	42	7	6	3	32
記事数	158	82	92	11	10	5	47

出典：筆者作成。

表5 編集者以外の主な「常連執筆者」

氏 名	寄稿記事数	主な分野
サーリフ・マジュディー	17	季節のあいさつ・賞賛、文学、道德
マンスール・アフマド	13	化学、啓蒙（公衆衛生、生活）
タードロス・ワフビー	11	歴史、季節のあいさつ・賞賛、哲学
ミーハーイール・アブドゥッサイイド	5	啓蒙（教育・知識）、数学、歴史
アブドゥッラー・アブー・スワード	5	啓蒙（農業、生活）

出典：筆者作成。

うに一八七一年の連続講義の登壇者が含まれている点は [Kalmbach 2020: 89]⁽²⁴⁾、編集者と共通する傾向である。編集者と執筆者双方にタフターウィーの知己が多数含まれた事実は、『学校の庭』の編集過程における彼の人的ネットワークの重要度を示している。

他方、執筆者の中に学生が数多く含まれる点は、編集部とは明確に異なる傾向である。すでに述べたように、『学校の庭』にとり学生は主要な読者層であったが、執筆者の属性に関する分析からは、Yousef [2016: 42] も指摘するように、誌面の充実に学生が重要な役割を担っていたことが分かる。⁽²⁵⁾ 創刊号当初から、学生の寄稿は予定されていた。⁽²⁶⁾ 学生の記事の大半は、数学や工学などの問題に対する答案だが、同誌が教員と学生による意見交換の場や、より高度な学問への導入の場として機能していた可能性が指摘できる。

また、ミーハーイール・アブドゥッサイイドやタードルス・ワフビー Tadrus Wahbi（一八六〇～一九三四）などのコプト教徒が常連執筆者の一員だったことも注目に値する。⁽²⁷⁾ 編集部にはコプト教徒は含まれていなかったが、彼らも翻訳者や教員などの学校関係者として、主に外国の記事の翻訳を通して『学校の庭』の誌面に貢献し

ていた。当時、コプト教会をめぐって緊張感はあったものの、活用可能な技術や人材を採用する政府の方針から、多くのコプト教徒が役人として登用され、一九世紀末には官僚の四五パーセントを占めていたとされる〔Pennington 1982: 160〕。常連執筆者にコプト教徒が含まれていたことから、彼らが知識人層の一部として、教育分野を含む幅広い分野で活躍する土壤があっただけでなく、コプト教徒が積極的に近代化の促進に関与していたことが示唆される。

二 掲載記事の主題から見た誌面の特徴とその背景

『学校の庭』は、政治よりも文学 (adabiyā) や学術 (ilmīyā) に重点を置いた雑誌とされるが [Hasan and Dusuqi 1975: 37]、より具体的にはどのような主題が中心的に扱われたのだろうか。以下では、同誌に掲載された記事を主題別に分類したうえで、関連記事の点数と分量 (頁数) を把握することにより、当該主題が『学校の庭』の誌面に登場する頻度を評価する。点数に加え頁数に着目する理由は、当該主題に対する『学校の庭』編集部に関心度の高さを把握するには、関連記事の点数の多

寡に加え、頁数の多寡にも着目する必要があるためである。⁽²⁸⁾その後、誌面に登場する頻度が高い複数の主題に着目し、関連記事の内容を紹介すると同時に、それらが掲載された背景を当時の時代状況をふまえながら考察する。なお、記事を主題別に分類するにあたり、大分類、小分類ともに、各記事の冒頭にしばしば示された紹介文の記述を参考にし、それに加えて、大分類に関しては当時の近代学校の科目を参照した。これらの紹介文は、編集者により付記されたものであり、当該記事の内容を把握するのに役立つ。⁽²⁹⁾

まず、掲載記事を主題ごとに大きく九種類に分類し、その分量 (頁数) をもとに『学校の庭』がどの主題を重視したのか検討する。その年ごとの推移を示したものが図1である。

図1が示すように、自然科学に関する記事の急増による順位の変動はあるものの、『学校の庭』の刊行期間を通じて分量が一貫して多いのはアラビア語、社会、数学、啓蒙の四主題であり、これらの主題を『学校の庭』が重視したことがわかる。これらの主題に関する記事が多い直接の理由は、アラビア語と社会、啓蒙は関連記事に連載が多いこと、数学は学生や教員の主な執筆分野である

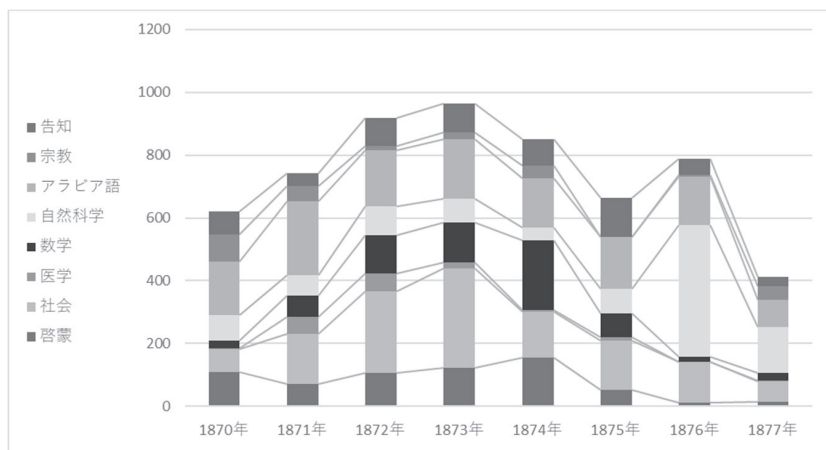


図1 主題（大分類）別の分量（総頁数）の推移 出典：筆者作成

ことが関係している。⁽³⁰⁾ 連載が始まると、連載が終了するまでの期間、関連する内容が掲載され続けることになるため、当然ながら誌面において当該主題への言及は増える。宗教に関する記事は、一八七〇年と一八七四年を除き多いとは言えない。これは、Yousef [2008: 113-114] の主張から受ける、宗教色が濃いという印象とは異なるものである。⁽³¹⁾

上記の九分類（大分類）をさらに詳しくその主題ごとに分類（小分類）し、その記事点数と総頁数を示したものが表6である。

表6のように、小分類に従い、アラビア語、社会、数学、啓蒙に関連する記事をさらに細かく分類すると、関連記事の点数（一〇点前後）と分量（二〇〇頁前後）双方が多い主題は、学校局の報告書や時候挨拶、賛辞などの告知欄に掲載された記事を除けば、アラビア語は「文学」、数学（小分類無し）、社会は「歴史」、啓蒙は「教育・知識」および「公衆衛生」であり、編集部あるいは「常連執筆者」が専門とする分野にはほぼ対応する（表2および表5参照）。⁽³²⁾ 分野によって、記事の長さの傾向は異なり、告知は短い記事が多いのに対して、自然科学や社会、啓蒙の記事は、記事の数は限られていても、長文

表6 掲載記事の主題別分類および記事点数と総頁数

大分類	小分類	記事点数	総頁数
告 知	学校局報告書	66	339
	時候挨拶・賛辞 (tahni'a)	87	201
	雑誌広報 (i'lān/tanbih)	25	48
宗 教	イスラーム	15	186
	哲学 (falsafa)	6	72
アラビア語	文学 (adab)	48	1037
	逸話 (riwāya/hikāya/nādira/nikāt)	17	134
	文法 (naḥw)	7	81
	謎々 (luḡẓ)	50	65
	道徳 (akhlāq)	6	22
自然科学	化学 (kimiyā')	13	401
	物理 (ṭabī'a)	1	286
	天文学 (kawākib/falak)	6	185
	植物学 (nabāt)	1	92
	工学 (handasa/mikānikiya)	15	35
数 学	数学 (riyāḍa/jabariya/ḥisābiya)	63	638
医 学	生物学 (解剖学)	7	79
	医学 (ṭibbiya)	9	76
社 会	歴史 (tarikh)	31	1095
	地理 (juḡhrāfiya)	8	69
	文化慣習 ('āda)	5	51
	法 (qānūn/shar'iya/fiqhiya)	11	48
	政治経済	3	25
	報道	4	17
啓 蒙	教育・知識 (tarbiya/'ilm/'ulūm)	17	304
	公衆衛生 (siḥḥiya)	8	238
	農業 (zirā'a)	4	44
	生活 (ma'ishiya)	8	40
	女性 (nisā')	2	16
その他		9	61

出典：筆者作成。分類は『学校の庭』における記載と近代学校の科目による。⁽³⁴⁾

の記事が多く、全体で見ると多くの頁数が割かれている。何故これらの主題が『学校の庭』において特に重視されたのだろうか。『学校の庭』は、編集と執筆の担い手と読者の双方に、教師や学生をはじめ学校関係者が数多く含まれたことはすでに述べた。さらに、当時の公教育のカリキュラムをふまえると、公教育の補完を目的に『教育の庭』が編集・利用された可能性が浮上する。上記の四主題の内、数学と歴史、文学の三主題は、アズハル学院に代表される同時代の伝統的な教育機関が等閑視する一方 [Brugman 1984: 324; Crabbs 1984: 87-88; Gesink 2010: 39-40; Patel 2013: 184]⁽³⁵⁾、官立の教育機関が重視した「新しい」教科であり、当該機関の教師と学生の双方にその重要性を周知させる必要が認識されていた [Kalmbach 2020: 93]⁽³⁶⁾。

当時の公教育制度は、初等学校 (madrasa al-ibtidā'iya) と予科学校 (madrasa al-tahiziya) に特別学校 (madrasa al-khususiya) を加えた三段階からなり ['Abd al-Karim 1945: 397]⁽³⁷⁾、初等学校や予科学校がカリキュラムに数学 (あるいは算数) と歴史を加えたほか [Crabbs 1984: 94; Kalmbach 2020: 68-69, 107; Reid 2002: 147-148]⁽³⁸⁾、特別学校の中では工学校 (Madrāsāt al-Mu-

handiskhāna)、行政・外国語学校 (Madrāsāt al-Idāra wa al-Asum) が歴史を、ダール・アル＝ウルームが歴史と文学を教科に採用した [Crabbs 1984: 94; Kalmbach 2020: 106]⁽³⁹⁾。特別学校の設置数に対し、予科学校の設置数が限られていた当時 [Kalmbach 2020: 100]⁽⁴⁰⁾、特別学校の学生の中には伝統的教育機関出身者が多く含まれたため、未習の教科である数学や歴史の学習機会を彼らに提供することは総じて重要な意味を持ったが、とりわけ『学校の庭』創刊後間もなく初等学校の教員養成を目的に設立されたダール・アル＝ウルームに在籍する学生にとり、「新たな」教科に関する知識の習得はより喫緊の課題であった。なぜならば、同校に在籍した学生の多くは、これらの教科を学ぶ機会が少ない宗教教育出身者が占めたほか [Kalmbach 2020: 106]⁽⁴¹⁾、これらの教科を重視する公教育制度の担い手となることが期待されていたためである⁽⁴²⁾。

ダール・アル＝ウルーム設立の契機となった一八七一年の連続講義に登壇した者の多くが『学校の庭』の編集に関与したことに加え、同校が重視した教科に関する記事が数多く掲載されたことは、『学校の庭』が近代教育、特にダール・アル＝ウルームにおける教育との関連を強

く意識した雑誌であることを示している [Brugman 1984: 322]。とりわけ文学と歴史は、その後のダール・アル＝ウルームにおける中心的な教科となり、数多くの人材を輩出するようになるが [Crabbs 1984: 95, 101-102; Kalmbach 2020: 111, 151]、文学に関してその礎を築いたのは「文士たちの師」(Shaykh al-Udaba')と称されたフサイン・マルサフィーである。彼は、既出の連続講義に登壇し、文学を講じた後、ダール・アル＝ウルームにおける文学担当教員に着任すると [Brugman 1984: 324; Kalmbach 2020: 89]、すでに述べたように『学校の庭』に文学に関する連載記事を寄稿した [Kalm-

bach 2020: 111]。また、『学校の庭』編集者の一人アブドゥッラー・フィクリーは、アラビア語散文文体の発展に貢献した一人と知られ、アラブ文学に関するマルサフィーの著作に唯一言及される同時代の文人だった [Brugman 1984: 77-80]⁽⁴¹⁾。一方、歴史の分野において両者を結びつけるのは『学校の庭』編集主幹タフターウィーと、タフターウィーの薫陶を受けた「常連執筆者」の一人アブー・スウードである。Crabbs [1984: 72-74]によれば、前者は外国語学校 (Madrasat al-Alsun) の校長を務めた際に数多くの歴史に関連する文

献をアラビア語に翻訳したほか、自ら歴史に関する著作を執筆した。後者は、タフターウィーと同じく歴史に関する文献の翻訳に関わり [Crabbs 1984: 72-73]、古代エジプト文明の遺産に高い関心を示したほか [Reid 2002: 112]、ダール・アル＝ウルームの歴史教師を務めた [Yousef 2008: 121]。『学校の庭』には、以下のような謎々 (yughn) が文学と同様に数多く紹介されている点も注目される。分量こそ少ないものの、文学関連の記事を上回る六〇点の記事が掲載されている。

保育園で基礎を成長させ、学校で学問分野を伸ばしたような都市の教養人や現代の優れた人々は、比喩の素晴らしい実体のない名詞を何と呼ぶか。地や空における様々な名詞は、その単語で呼ばれている。あなたは、それを動物に対して見ることも固体に対して見ることもある。それが不在の時は、反対に、他のものがある状態である。その単語は、未知のものであると同時によく知られた単語であり、合計で六文字である。(中略) その単語は、愛する者を出す時の単語である。重荷を負う人に対して言う

普通名詞である。その単語の冒頭（の文字）を切り離せば、ああ賢い人よ、単語は「悪魔」（shayān）になる。冒頭（の文字）を「い〇」（ishrin）の文字の一つと変えれば、単語は「奇跡」(mu'jiza) になる [Rawda 1871: no. 13: 16]。⁽⁴²⁾

当時の公教育のカリキュラムを参照する限り、謎々が教材として使用された確証は無いものの、『学校の庭』に掲載された背景には、その教育的効果への期待が挙げられる。一九世紀イギリス文学における謎々を研究した Hecimovich [2008: 6-8] によれば、同時代のイギリスでは発音や綴り、語彙、文法の知識の向上に高い教育的効果を期待して、従来は口承されてきた謎々が当時発展著しい定期刊行物に掲載されるようになったという。当時の学校局は、ヨーロッパの学校を視察し参考にしたことや「ミツチエル 2014: 93」、『学校の庭』は、他誌の⁽⁴³⁾記事をしばしば転載したことなどから明らかなように、編集部が内外の定期刊行物の動向に注意を払っていた。また、フランス戯曲の口語アラビア語訳を掲載するなど口語文化への関心も示していた。⁽⁴⁴⁾これらのことから、ヨーロッパにおける謎々などの口語文化を取り入れる土壌が

形成されていたと考えられる。⁽⁴⁵⁾

他方、「公衆衛生」に関するもののように、公教育のカリキュラムに含まれない記事が何故掲載されたのだろうか。「教育・知識」に該当する記事は、無知によって引き起こされる問題や危険性、知識の価値を説明する啓発記事が含まれる。以下の二つの記事は、災いによる人々の危険や不安を避ける手段として知識が有効であると説明している。

無知こそが、腐敗した考え (itqadat fasida) の原因であり、無駄な恐れ (mukhāwif bātila) やよくわしくない想像を生み出している。無駄な恐れは、人々にとっては混乱である。 [Rawda 1872: no.6: 9] そのため、知識の普及 (bathth al-ma'arif) は、無知 (jahil) によって発生し得る、恐れをなくし、被害や腐敗、病気の発生の防止のために、役に立つ (munfi'd) ものである。（中略）私たちの性質の十分な (qusur) 、力の弱さ (khawar) 、知識の弱さ (ajiz ma'rifa) によって、災いを起こる前に認知したり、降りかかることを防ぐことができなかったりする。また、疫病や地震、洪水、火山の噴火などを

知っていたとしても、それらを止めることができない。もし知識 (ma'arif) が広がれば、どんな災いであっても、不安になることはない。[Rawda 1872: no. 7: 6]

「教育・知識」に該当する記事が掲載された理由は、教育雑誌という本誌の特性上、知識の価値や重要性を讀者に伝えることが必要不可欠だったためと考えられる。これらの記事の特徴として、過去の時代を「無知」の時代として描くことから、既存の知識だけでなく、「新しい」⁽⁴⁶⁾学知の重要性を説明しようとしていた可能性が考えられる。

「公衆衛生」には、いわゆる「教科」に関する記事とは異なり、日常生活に直ちに応用可能な実用的知識を紹介しているほか、予防医学に対する人々の意識の低さに警鐘を鳴らすような啓発記事が含まれる [Rawda 1872: no. 2: 3]。例えば、以下の記事は、病気や寄生虫を予防するための衛生管理の重要性を強調し、具体的な対策を示している。

私が提供できる簡単な助言は、寄生虫に (自身を)

さらさないということである。第一に、透明で濾過された水を飲むこと。第二に、透明で濾過された水で洗ってからでない限り、果物や野菜を食べないこと。第三に、完全に焼けていない限り、肉を食べないこと。第四に、台所をきれいに保ち、手は汚い場所に置かないこと。第五に、透明で濾過された水を手に入れることが難しい場合、沸かしてからでない限り、使わないこと。第六に、ナイル川で沐浴する者は、それを誇るべきではない。これらの助言に従った者は全員、この寄生虫の被害がないだろう⁽⁴⁷⁾。[Rawda 1872: no. 2: 7-8]。

ヨーロッパ医学の影響を受け、当時、空気の汚染 (瘴気) が病気をもたらすと考えられており、特定の衛生条件と気候が、感染症の流行を引き起こすとされていた [ミツチエル 2014: 98; Kuhke 1990: 98]。そのため、不衛生な場所の排除や、公衆衛生の向上が、伝染病から身を守る手段だと考えられていた [ミツチエル 2014: 98]。当時、マラリア、コレラなどの伝染病以外にも、住血吸虫症や鉤虫感染症などの寄生虫が大きな問題となっていたため [Derr 2019: 105]、公衆衛生に対する意識が高く、

『学校の庭』でも取り上げられる主題であつたと考えられる。

以上の「啓蒙」に分類された記事の考察から、『学校の庭』では、学校教育に含まれない分野の知識も紹介されており、それに関しては、啓蒙的な意味合いが強かったと理解されよう。

おわりに

以上、一九世紀末にエジプト政府が発行した教育雑誌『学校の庭』に照準を定め、主に担い手（編集者や寄稿者）を中心に読者を含めた同誌を支えた人々の属性を提示したほか、掲載記事を主題別に分類し、数量的に把握することにより、誌面の特徴を分析・解明した。その結果、担い手、とくに寄稿者と読者に学校関係者が多数含まれていたこと、編集者・寄稿者双方におけるタフターウィーの影響力の大きさなどを確認した。誌面の特徴としては、刊行時期を通じ、数学、歴史、文学など、公教育の実施に伴い導入された「新しい」教科に多くの紙幅が割かれていたことを明らかにし、こうした特徴は教員・学生双方に対しその重要性を周知し、公教育を補完する役割が同誌に与えられていたことを明示した。それ

に加えて、公教育の内容とは直接には関係が無い主題が掲載されたことをふまえ、同誌には学校外の社会に対する啓蒙や啓蒙という目的もあつたことも指摘した。

ただし、近代エジプトの知識人や、出版と教育の関係については、まだ研究されるべき点が残されている。また、『学校の庭』などの教育雑誌が、近代アラブの出版物においてどのような役割を担ったのか、出版物がどのような学問や知識を扱ったのかなどについても、他の出版物の事例と合わせて考察されるべきであるが、それらに関しては今後の課題としたい。

参考文献

一次資料

Raʿdaʿ al-Madāris. 1870-1877 (reprinted in 1997). al-Qāhira: al-Mabaiʿat Dār al-Kutub al-Miṣrīya.

二次資料

小杉 泰 二〇〇二 「アズハル」大塚和夫他（編）『岩波イ
スラーム辞典』岩波書店。
ミツチェル、ティモシー（大塚和夫・赤堀雅幸訳）二〇一
四 『エジプトを植民地化する―博覧会世界と規律訓練的
権力』法政大学出版局。

ʿAbd al-Karīm, Ahmad ʿIzzat. 1945. *Tārīkh al-Taʿlīm fi*

- Min Nihāyat Ḥukm Muḥammad ‘Alī ilā Awā’il Ḥukm Taufiq* 1848-1882. Vol. 2, al-Qāhira: Wizārat al-Mārif al-‘Umūmiya.
- Aroian, Lois A. 1979. "Education and Employment: The Graduates of Dār al-‘Ulūm (1873-1923)." *Journal of the American Research Center in Egypt* 16: 163-74.
- Ayalon, Ami 1995. *The Press in the Arab Middle East: A History*. Oxford: Oxford University Press.
- . 2010. "Arabic Booksellers and Bookshops in the Age of Printing, 1850-1914". *British Journal of Middle Eastern Studies*. 37 (1): 73-93.
- Brugman, J. 1984. *An Introduction to the History of Modern Arabic Literature in Egypt*. Leiden: E. J. Brill.
- Crabbs, Jr., Jack A. 1984. *The Writing of History in Nineteenth-Century Egypt: A Study in National Transformation*. Detroit: Wayne State University Press.
- Derr, Jennifer L. 2019. *The Lived Nile: Environment, Disease, and Material Colonial Economy in Egypt*. Stanford: Stanford University Press.
- El Shamsy, Ahmed. 2020. *Rediscovering the Islamic Classics: How Editors and Print Culture Transformed an Intellectual Tradition*. Princeton: Princeton University Press.
- Fahmy, Ziad. 2011. *Ordinary Egyptians: Creating the Modern Nation through Popular Culture*. Stanford, California: Stanford University Press.
- Gesink, Indira Falk. 2010. *Islamic Reform and Conservatism: Al-Azhar and the Evolution of Modern Sunni Islam*. London: Tauris Academic Studies.
- Goldschmidt Jr., Arthur. 2000. *Biographical Dictionary of Modern Egypt*. Boulder: Lynne Rienner Publishers.
- Green, Arnold H. 1988. "The History of Libraries in the Arab World: A Diffusionist Model". *Libraries & Culture*. 23 (4): 454-473.
- Ḥasan, Muḥammad ‘Abd al-Ghānī and ‘Abd al-‘Azīz Duṣūqī. 1975. *Raʿdaṭ al-Madāris, Nash’ al-ḥaḥ wa Ittiḥādāt-hā al-‘Adabiyya wa al-‘Ilmiyya*. al-Qāhira: al-Ḥay’a al-Miṣriyya al-‘Amma li-l-Kitāb.
- Hecimovich, Gregg. 2008. *Puzzling the Reader: Riddles in Nineteenth-Century British Literature*. New York: Peter Lang Publishing.
- Heyworth-Dunne, James. 1939. *An Introduction to the History of Education in Modern Egypt*. London: Luzac and Co.
- Hourani, Albert. 1983. *Arabic Thought in the Liberal Age, 1798-1939*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hunter, F. Robert. 1999. *Egypt under the Khedives, 1805-1879: From Household Government to Modern Bureaucracy*. Cairo: American University in Cairo Press.
- Kalmbach, Hilary. 2020. *Islamic Knowledge and the Making of Modern Egypt*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Kenny, Lorne M. 1967. "Alī Mubārak: Nineteenth Century Egyptian Educator and Administrator". *Middle East Journal*. 21 (1): 35-51.
- Kuhnke, Laverne. 1990. *Lives at Risk: Public Health in Nineteenth Century Egypt*. Los Angeles: University of California Press.
- Livingston, John W. 2018. *In the Shadows of Glories Past: Jihad for Modern Science in Muslim Societies, 1850 to The Arab Spring*. Florida: Routledge.
- Newman, Daniel L. 2004. "Introduction." Riṭā'a Ra'ī' al-Tahāwī, introduced and translated by Daniel L. Newman, *An Imam in Paris: Account of a Stay in France by an Egyptian Cleric (1826-1831)*. London: Saqi Books. 13-92.
- Patel, Abdulrazzak. 2013. *The Arab Nahḍah: The Making of the Intellectual and Humanist Movement*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Pennington, J. D. 1982. "The Copts in Modern Egypt." *Middle Eastern Studies*. 18(2): 158-179.
- Ra'ī', 'Abd al-Rahmān. 1948. *ʿAsr Ismā'īl al-Qāhira: Dār al-Ma'ārif* (URL: https://archive.org/details/1_20200930_20200930_1217 最終閲覧日二〇二四年六月八日)
- Reid, Donald M. 2002. *Whose Pharaohs?: Archaeology, Museums, and Egyptian National Identity from Napoleon to World War I*. Berkeley: University of California Press.
- Stolz, Daniel A. 2018. *The Lighthouse and the Observatory: Islam, Science, and Empire in Late Ottoman Egypt*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tūsūn, 'Umar. 1934. *al-Biṭhāt al-Ilmiyyah fi 'Abd Muḥammad 'Alī al-Qāhira: Maḥabāt Salāh al-Dīn* (URL: <https://archive.org/details/p.d13226/page/n3/mode/2up> 最終閲覧日二〇二四年六月七日)
- Yousef, Hoda A. 2008. "Reassessing Egypt's Dual System of Education under Ismā'īl: Growing 'Ilm and Shifting Ground in Egypt's First Educational Journal Rawdat al-Madaris, 1870-77". *International Journal of Middle East Studies*. 40: 109-130.
- . 2016. *Composing Egypt: Reading, Writing, and the Emergence of a Modern Nation, 1870-1930*. Stanford, Calif: Stanford University Press.
- Zirikli, Khayr Dīn al-. 1989. *al-A'lām: Qāmūs Tarājīm li-Ashḥar al-Riyāl wa al-Nisā' min al-'Arab wa al-Muslīmīn wa al-Muslīmīyīn*. Bayrūt: Dār al-'Ilm li-Malāyīn.

註

- (1) 工学校を経て一八四四年に派遣留学生として渡仏し、五年間を過ごす。帰国後は工学校の校長を務めた。総督サイード Sa'id (在位一八五四―一八六三) に冷遇されるものの、イスマーイーールの時代に復権し、一八六八年には教育、公共事業、鉄道通信、ワクフの大臣職を兼任した [Hasan and Dusiqi 1975: 329, Heyworth-Dunne 1939: 253, 347; Hunter 1999: 126, 129; Kenny 1967: 36, 38, 44]。
- (2) タッターブ¹⁾、クルアーン²⁾の暗唱と読め書きを教える

場だった [Heyworth-Dunne 1939: 361]。

- (3) カイロにあるモスク、ウラマー組織、大学、中・高校、法学委員会などを包括する学術・教育機構。九七〇年にファティマ朝の中央モスクとして設立され、九七八年から教育も開始された。当初はイスマール派の学院であったが、アイユーブ朝時代からスナナ派の学院として発展した。オスマン朝時代にも、イスラーム諸学およびアラビア語学の拠点としてウラマーの育成を続けた [小杉 2002]。

- (4) アズハル学院における学修を終えた後、イマーム (導師) として留学生団に加わり一八二六年に渡仏し、五年間を過ごした。帰国後は外国語学校 (Madrasat al-Alsun) の校長、翻訳局長、官報『埃及諸事』*al-Maqaṭi al-Miṣriya* 編集長などを務めた。その後、総督アッバース・コルシー一世 *Abbas Hilmi al-Awwal* (在位一八四九—一八五四) に冷遇されるものの、イスマール時代の時代に本格的に復権し、翻訳局長を再び務めた。[Goldschmidt 2000: 205, Hasan and Dusūqī 1975: 324, 328, Heyworth-Dunne 1939: 265–267]

- (5) その他、主な転載元は以下の通り。新聞『ジャワイブ (返答)』*al-Jawāib* (一八六一—一八八四。イスタンブル)、『新聞』*al-Jinan* (一八七〇—一八八六。ベイルート)、『雑誌』*al-Muṭataf* (選集)、『*al-Muṭataf* (一八七六—一九五二。ベイルートおもひカイロ) [Ayalon 1995: 14–15, Hasan and Dusūqī 1975: 345, Hourani 1983: 98, 245–246, Livingston 2018: 94–95]。

- (6) Hasan and Dusūqī [1975: 89] によれば、月給一五〇クルシ以上 の 学 校 局、学 校、国 立 図 書 館 の 職 員 全 員 に『学校の庭』の購読が義務付けられていた。

- (7) 無償配布の対象については先行研究の間に見解の相違があり、Hasan and Dusūqī [1975: 88–89] は無償配布の対象は予科学校の成績上位者三人に限られたとするのに対し、Livingston [2018: 64] は予科学校の学生全員が無償配布の対象であったとする。他方、ミッチェル [2014: 134] は官立学校の全学生に無償配布されたとする。

- (8) ムハンマド・アリーが学校省に併設し、一八七〇年にイスマールが独立した機関として再興した国立図書館 (al-Kutubkhāna al-Khidwīya ʾa al-Maktaba al-Khidwīya, al-Maktaba al-Aḥiyya などと呼ばれる) は、多くの学校が集中していたカイロのダルブ・ジャマリーズ地区に位置しており、政府の出版物を収蔵していた [Ayalon 2010: 77]。また、Yousef [2016: 45] は、非識字者が印刷物にアクセスしていた可能性を示唆しており、実際に出版物を持っていなくても読み上げや貸し出しのサービスが発展していた可能性がある。

- (9) アリー・ファフミーは、一八四四年に政府派遣留学生としてフランスに留学し、帰国後は行政・外国語学校 (Madrasat al-Idāra wa al-Alsun) の教師、ダール・マル＝ウルームの校長などを歴任した。『学校の庭』廃刊後の一八八二年には公教育省 (Diwān al-Maʾārif al-ʾUmūmiya) の次官 (wakīl) に就任した [Hasan and Dusūqī 1975: 337, Livingston 2018: 65, Tūsūn 1934: 311–

312]。

- (10) ブルークシュはドイツ出身のエジプト学者であり、ムバラクが一八六九年に開設した古代語学校 (Madrasat al-Lisān al-Qadīm) の初代校長に就任し、ドイツ語と古代エジプト語を教授した [Hasan and Dusūqī 1975: 364; Heyworth-Dunne 1939: 354; Reid 2002: 116-118]。
- (11) ファラキーは、工学校 (Madrasat al-Muhandisikhāna) と天文台 (Rasdakhāna) に学んだ後、パリに留学し、帰国後は工学校の教師となった [Goldschmidt 2000: 52; Hasan and Dusūqī 1975: 404; Rāfi 1948: 274]。プラークに置かれていた天文台とファラキーの経歴については [Stolz 2018: 85-86] も参照のこと。彼の他にナダーがフランスに、バドルがイギリスに留学した [Hasan and Dusūqī 1975: 386, 388-389; Rāfi 1948: 280-281]。
- (12) 四名に近代学校に在籍した経歴を確認できる。ファラキーは工学校と天文台に在籍、カドリーはタフターウィーが校長を務めた外国語学校卒、バドル、ナダーの兩名は医学学校 (Madrasat al-Tibb) 卒であった。医学学校は、ムハンマド・アリーが一八二七年にアブー・ザアバル病院に付設した後、一八三六年にカスル・アイニ (Qasr al-'Ayni) に移転した [Heyworth-Dunne 1939: 117-118, 125]。
- (13) フィクトリーは、アズハル学院に学んだ後、国立図書館や教育省 (Nizārat al-Ma'arif) の次官と大臣を歴任した [Hasan and Dusūqī 1975: 334; Rāfi 1948: 263]。
- (14) カドリーは、外国語学校を卒業後タフターウィーの翻訳事業を補佐するかたわら、イスラーム法やヨーロッパ法に関する知見を深めた。ナポレオン法典の翻訳に参加したほか、法相や教育相を歴任した [Goldschmidt 2000: 159]。
- (15) メトゥーフは予科学校 (Madrasa al-Tajīziyya) や計量・会計学校 (Madrasat al-Misāha wa al-Muḥāsaba) のアラビア語教師であり、笑話や謎々に関する記事を執筆した [Hasan and Dusūqī 1975: 366]。バドルはイギリス留学後に医学校の教師となった [Hasan and Dusūqī 1975: 386; Rāfi 1948: 280-281]。ナダーは留学先のフランスから帰国後に医学校や工学校、農学校 (Madrasat al-Zirā'a) の教師となった [Hasan and Dusūqī 1975: 388-389]。
- (16) この連続講義には、後に『学校の庭』編集者となるブルークシュ、ファラキーに加え、ナダーが登場した。
- (17) 例えば、タフターウィーの『ビジャーズ地方の住民の伝記 (sira) の要約』の連載が三年次 (一八七二年) から四四号にわたり掲載されたほか、『男女の子供のための誠実な案内書』の連載は五年次 (一八七四年) から二六号にわたり掲載された。また、ファラキーは、三年次 (一八七二年) から三十一号にわたって天気観測に関する記事に掲載した。
- (18) 『学校の庭』の執筆者には、学校局やワクフ局 Diwān al-Awqāf、公共事業局 Diwān al-Ashghāl al-Umūmiyya、特別局 Diwān al-Khāssa al-Khidmīyya などの官僚 (補佐官 mu'awin、書記 kātib、顧問 mustashār)、学校長 (nazir)

や学校長代理 (wakil) などの学校関係者がいる。例えばムハンマド・ハミード Muhammad Hamida はワクフ部門の管理者 (rais Idarat al-Awqāf) で、謎々、数学、イスラームに関する短い記事を五つ寄稿した [Rawda 1870: no. 7: 22, 1870: no. 10: 18-19, 1870: no. 11: 21]。また、ヤアクーブ・サブリー Ya'qūb Sabrī は、行政・外国語学校の校長代理 (wakil) で、農業や数学、生物に関する記事を三つ寄稿した [Rawda 1870: no. 11: 13-21, 1870: no. 12: 3-9]。両者とも、『学校の庭』の出版時期の間に所属・職位が変化しており、ハミードはワクフ局の第二書記 (katib thām) [Rawda 1871: no. 2: 14, 1871: no. 4: 20]、サブリーはダール・アル＝ウルームの教員 [Rawda 1874: no. 15: 15-16] となっていた。

- (19) 宗教教育出身の執筆者のなかには、執筆した唯一の記事が非常に長文であるために『学校の庭』における存在感を高めた者がいる。例えば、アズハル学院で学んだ後、ダール・アル＝ウルームで教師を務めたフサイン・マルサフィー Husayn al-Marsafī (1815-1890) の場合、彼が『学校の庭』に寄稿した唯一の記事「ダール・アル＝ウルームにおける文学の授業の要約」は八九号にわたり掲載された。マルサフィーについては [Goldschmidt 2000: 125; Rāfi 1948: 258] を参照のこと。

(20) 五点以上の記事を寄稿した執筆者は他にも複数人存在するが、各記事が短く連載ではない場合は、誌面全体において重要な地位を占めていないため、ここでは「常連執筆者」に含めていない。

- (21) アブドゥッサイイドは、カイロ出身のコプト教徒ジャーナリスト。アメリカン学校とコプト学校で学んだ後、アズハル学院でアラビア語を学ぶ。一八七七年には新聞『祖国』 al-Waṭan を創刊した。ハイルツデーイン・ズィリクリーの人名辞典によると、一八六〇年にカイロに生まれたとされているが、『学校の庭』創刊年から執筆者として登場することを考慮すると、この情報は間違っているのではないかと考えられる。『学校の庭』ではアメリカン学校の英語の教師として紹介され、啓蒙や歴史などに関する記事五点を寄稿している [Hasan and Dusūqī 1975: 380-381; Zirikī 1989: vol. 7, 337]。

- (22) アブー・スウードは、翻訳家兼ジャーナリスト。幼少時より翻訳に関心を示し、外国語学校に進学後はアラビア語に加え、フランス語やイタリア語を学んだ。ダール・アル＝ウルームの教師となり、歴史を教えた。『学校の庭』には主に啓蒙に関する記事を五点寄稿したほか、ヨーロッパ人による記事の翻訳を担当した [Hasan and Dusūqī 1975: 345; Rāfi 1948: 259]。なお、創刊号から翌一八七一年第三号の『学校の庭』は、彼が発行号から翌『ナイル河谷』の印刷所を版元とした。ミツチエル [2014: 134] によれば、彼は当時学校局の職員であり、『ナイル河谷』の発行費用が官費により賄われるなど政府と深いつながりがあったとされる。

- (23) マジュデーイーは、カイロ近郊ギザ出身の翻訳家。外国語学校に進学し、アラビア語とフランス語を学び、卒業後は軍学校の翻訳家、工学校の語学教師兼翻訳家などを

務めたほか、翻訳局に勤務し、数多くのフランス語書籍をアラビア語に翻訳した。『学校の庭』に賛辞や文学関連の記事を計一七点寄稿した [Goldschmidt 2000: 119, 199; Rāfi 1948: 266-267]。タフターウィーの伝記を著した) とも知られる [Newman 2004: 45]。

- (24) マンスール・アフマドの詳細な経歴は不明だが、寄稿時は工学校の化学教員を務めていた。化学、健康などの公衆衛生、生活に関する一三点の記事を寄稿した [Hasan and Dusūqi 1975: 361; Rāfi 1948: 282]。一八七一年のダルブ・ジャマーミーズにおける連続講義に登壇し、自然科学を講じた。

- (25) 実際に、学生の記事は短いが多くあり、全体で七五もの学生による記事が掲載されている。二年次 (一八七一年) に二一記事と最も多く、その後三〜四年次 (一八七二〜一八七三年) は一年あたり五記事程度に減少するが、五〜六年次 (一八七四〜一八七五年) には再び増加し一年あたり一〇記事以上となった。七年次 (一八七六〜一八七六年) 以降は、全体の記事数と連動して減少した。
- (26) 創刊号に「優秀な学生たち (mutaḡadīrīn min talanīdha al-madāris) も、広めるべきものや、書くのにふさわしいものを差し込むだろう」という記述がある [Rawda 1870: no. 1: 7]。

- (27) タードロス・ワフビーは、カイロ出身のコプト教徒。アルメニア学校とコプト学校に学び、英仏伊語とアルメニア語を学んだほか、アズハル学院のイスラーム法学とアラビア語学の授業に参加した。卒業後は翻訳者となり、

コプト大学校 (Madrasat al-Aḡbāt al-Kubrā) の校長を務めた [Zirikī 1989: vol. 2, 82]。『学校の庭』では、翻訳者や英仏アラビア語の教員として紹介され、外国の歴史や神話に関する記事を中心に多岐にわたる記事を翻訳・執筆し、一一点の記事を寄稿した。

- (28) 本稿では、記事が一頁に満たなくても、一〇行以上だった場合、誌面の多くを占めているため、一頁として換算している。

- (29) 記事の紹介文には、以下のようなものがある。「この難解な謎々は、アズハルの教養人であるシャイフ・ムスタファ・ジャイブから、私たちに送られたものである」 [Rawda 1871: no. 13: 15]。『学校の庭』の編集部に、優れた青年で知性的な教育者、アメリカン学校の英語の教師であるミール・ハイル・アブドゥッサイイド・エフエーディーから、英語のいくつかの本をアラビア語に訳した選集の、知識の歴史に関する序文が届いた。」 [Rawda 1870: no. 20: 15]。

- (30) 『学校の庭』の一部の巻において、連載は約半数を占めている。例えば、六年次 (一八七五年) には、一五七記事中八五記事が連載記事、七年次には、一二三記事中六九記事が連載記事である。その中でも、アラビア語は八九号にわたって掲載されたフサイン・マルサフィーの文学の記事に代表されるように、記事が長く連載になることが多かった。社会は、タードロス・ワフビーのトリノやイギリスなどの歴史の記事に代表される。彼のトリノに関する記事は一七号にわたって掲載されている。啓

蒙も、タフターウィーの『男女の子供のための誠実な案内書』(二六号にわたって掲載)や、ミハーイル・アブドゥッサイイドの知識に関する記事(一二号にわたって掲載)などの「教育・知識」の記事に代表されるように、連載記事が多かった。

- (31) Yousef [2008: 113] は、宗教関連の記事が多いとは明言していないものの、『学校の庭』全体を通して、知識の伝統性の特徴と主張している。その理由として、宗教関連の知識が特権的な地位を占めていた点や、記事の形式が伝統的な形式をとっていた点を挙げている。また、彼女は主題別に記事を分類した図を作成しているが、全ての記事を含めているのは一年次と八年次のみで、それ以外の年次では過半の記事を除外している。その結果、一年次と八年次の特徴が図に反映されている。彼女が分析に用いた記事は、一年次から二九記事、二年次から八記事、三年次から〇記事、四年次から四記事、五年次から〇記事、六年次から三記事、七年次から一記事、八年次から六記事であるため、偏りがあると言える。

Yousef [2008: 114] の分類は、大分類と小分類がないが、近似した分類を使用している。彼女の分類は以下のとおりである。自然科学、歴史、言語、文学、教育、謎々・諧謔、数学・工学、宗教、告知、健康、詩、医学、文化、地理学、哲学、音楽、報道。

- (32) 時候挨拶は、イードや年始などの季節行事に際して編集部や学生代表が執筆した記事であり、賛辞は、学校設立や学校での試験に際して教育を導入した副王イスマー

イルをはじめとするムハンマド・アリー家の功績を賞賛するもので、しばしば詩である。例えば、年始の挨拶は以下のような文章の後に、詩がつづられている。「新年の始まりに際して、副王殿下を祝福します。今年は、日々の出版物において、副王一族のもとに整備された充実した制度によって、すべての幸せで幸運な人に対する勅令を見ることができるよう」[Rawda 1875: no. 1: 12]。

- (33) 末期に掲載量が増える自然科学に分類され、掲載点数と頁数の多い化学、天文学は、編集部や「常連執筆者」に専門家がいたことが比較的高い掲載量が多い一因と考えられる。「常連執筆者」のマンスール・アフマドは前者の、編集部のイスマーイル・ムスタファー・フアキーは後者の専門家であった。

- (34) 「学校局報告書」や「イスラーム」、「政治経済」、「報道」は、『学校の庭』でそのような言葉で分類されているわけではないが、「統計結果」や「試験の様子」、「講演の様子」などの記載がある学校局による記事を「学校局報告書」、スンナ派やビドアなどのイスラームの制度に関する記事を「イスラーム」、アラブとヨーロッパの制度に関する記事や貿易に関する記事を「政治経済」、他の新聞から転載された世界情勢の記事を「報道」とした。

- (35) Brugman [1984: 324] によれば、一八七〇、一八七一年当時のアズハル学院のカリキュラムにある一一の教科の中に文学に関するものは存在しない。Shamsy [2020: 133] は、アズハル学院が文学を教科に含めるにあたり、

一八八八年に国外追放処分を解かれ帰国し、大ムフテ
イーに就任したムハンマド・アブドゥフ Muhammad
‘Abduh (一八四九～一九〇五) の尽力を重視すべきと指
摘する。さらにアブドゥフは、カリキュラムに歴史(イ
ブン・ハルドゥーン)の『歴史序説』を採用するようアズ
ハル学院に働きかけたものの、当時のアズハル総長によ
り拒絶された [Shamsy 2020: 150]。また、Kalmbach
[2020: 68-69] によれば、一八七二年にアズハル学院に
導入された教授資格(アリーミーヤ alimīya) 認定試験
の対象科目に数学や歴史といった教科は含まれず、一八
九六年の改革によりようやく算数が無試験の選択教科に
採用された。対照的に、近代学校におけるこれらの教科
の採用は早く、一八三七年以降タフターウィーが校長を
務めた外国語学校が語学と共に数学や歴史を教科に含め
た [Kalmbach 2020: 101]。

(36) [Kalmbach 2020: 195] によると、アラビア語が学生
たちに敬遠されているという事態に際し、アラビア語を
教えるために使われてきた知識体系(文法中心)を全面
的に見直すための手段として、アラブ文学に焦点を当て
ることが提唱された。また、[Shamsy 2020: 153] による
と、文学は言葉と意味を結びつけるもの、道徳の衰退は
言葉と意味の分離によって特徴づけられる現象と考えら
れていたため、文学が倫理的な個人の成長にとって極めて
重要であるという主張があった。このような背景から
アラブ文学が「新しい」教科の一つとして重視されたと
考えられる。歴史が重視されるようになった背景を理解

するためには、古代エジプト史に対する評価の変化につ
いて理解する必要がある。実際に歴史という文脈で教え
られたことや、『学校の庭』で扱われている歴史の記事の
半数程度が古代エジプトに関する記事が占めている。
[Reid 2002: 288-289] によると、エジプト人は当初イス
ラームの影響から古代エジプトに好印象を持っていなか
ったが、タフターウィーは、エジプトのアイデンティテ
ィを再考するなかで、古代エジプト的な要素を含むエジ
プトへの愛国心の重要性を議論するようになった。

(37) 当時、初等学校は、イスマールールの統治下で再開ま
たは設立され、各県の中心都市に置かれた [Hey-
worth-Dunne 1939: 346, 371]。予科学校はカイロとアレ
クサンドリア両都市に二校ずつ設置されていた [‘Abd al-
Karīm 1945: 397, 398, 414]。特別学校には医学校、工学
校、計量・会計学校、行政・外国語学校、製造学校 (Ma-
‘drasat al-‘Amaliyāt)、古代エジプト語学校、絵画学校、
農業学校などがあった [Heyworth-Dunne 1939: 353-354;
Rāī 1948: 202-205]。

(38) 予科学校における歴史の授業は、古代エジプト史や古
代ギリシア・ローマ史に重点が置かれる一方、一六世紀
以降の歴史は対象外だった。対照的にダール・アル・ウ
ルムにおける歴史の授業は、近世史と近代ヨーロッパ
史の比重が高かった。詳しくは [Crabbs 1984: 94; Reid
2002: 148] を参照のこと。

(39) Aroian [1979: 163] によれば、初等教育の教員養成
を目的とした同校だが、実際には卒業生はあらゆる教育

課程の教師となった。

- (40) マルサフィーの連載記事はダール・アル＝ウルームにおける論理学と文学に関する講義録であり、後に単行本にまとめられ刊行された [Kahbach 2020: 111]。このことが同誌において文学関連記事が増えた直接の理由である。

- (41) 文学以外の分野におけるフィクリーの業績については [Stolz 2018: 182-185] を参照のこと。

- (42) 次号には、この謎々の答えは「月」(qamar) の代用語「満月」(zaburqan) とする読者の寄稿が掲載されている [Rawda 1871: no. 14: 19-20]。

- (43) オーストリアの新聞のアズハル学院での教育に関する記事 [Rawda 1874: no. 6: 17-20]、フランスの雑誌『アジア』のタンズイムートに関する記事など [Rawda 1872: no. 15: 10]、ヨーロッパからもエジプトの教育や制度に関する記事が転載されている。また、ベイルートで教育雑誌『ムクタフ』が刊行された際には、月に関する記事の一部を転載した [Rawda 1876: no.13: 6-11]。外国の定期刊行物の内容に注視し、ある程度影響を受けていたのではないかと考えられる。

- (44) 『学校の庭』には、タフターウィーの弟子ムハンマド・ウスマーン・ジャラール Muhammad 'Uthman Jalāl (1829-1898) が口語アラビア語に翻訳したフランスの劇作家モリエールの戯曲が掲載されている [Fahmy 2011: 44]。

- (45) 他に、他の可能性が指摘しよう。Livingston [2018:

86] は、本稿が物語 (ḥikāyat) と共に「逸話」に分類した笑い話 (ḥikāṭ/nawāḍir) が『学校の庭』に掲載された理由を、学生の学習意欲の向上を意図したものと説明する。

- (46) 例として以下のような文章が挙げられる。「過去の世代の問題について考えると、無知 (ʿajl) の雲の間が、民衆の理性 (ʿaql) を覆い、彼らの心を不明瞭にさせていたことが分かるだろう。」 [Rawda 1870: no. 20: 16]。

- (47) 他号には、多人数による会食のさいに口を拭うための手巾の共有が衛生面に与える危険性を訴える記事が掲載されている [Rawda 1870: no. 8: 10]。